慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一九一八年のドイツ革命 : 社会民主党と労兵協議会との関係をとおして
Sub Title	
Author	渡辺, 郁美(Watanabe, Ikumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.2 (1969. 11) ,p.128(262)- 129(263)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19691100-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

発表要旨

ホレイショ・パラビチノに関する一考察

今村三南子

この研究は、エリザベス女王時代の政治と経済の一面を明らかにしようとするものです。

ホレイショ・パラビチノ Horatio Palavicino（1540～1600）は、エリザベス朝時代のイタリヤ出身の商人貴族です。彼は、英国政府上層部と結び、金融業、独占業、外交等の広い分野にわたつて活躍しています。このような人物がイタリヤ出身であつたということが、当時の英国の特殊性を示します。従つて、彼の事業の研究は、単なる伝記的興味にとどまらず、当時の政治・貿易・財政・社会変動に様々な光を投げかけるものです。

ホレイショは、ローマ法皇の保護の下に、明礬産業の独占を行つていましたが、契約更新のトラブルにより、ローマを離れ英国にわたります。一方英国は、外交上財政上の理由で、ホレイショの大陸に於ける信用や財力を必要とします。このような利害関係の一致が、両者を次第に深く結びつけていつたのです。

国内では、ホレイショは従来の在英イタリヤ金融業者と同様国家への貸付を行ないます。そこからもたらされる年金、有力者への融資、交易の独占権、徴税権等を得て、財力が急速に増大します。更に、ホレイショは、その財力を利用して政治権力と密接に結び、イギリス国内で有利な地位につこうとします。この様に、政治と経済とを背景として英国に入りこみ、勢力をたかめていきます。一五八五年に帰化した後、一五八七年には駐独大使の職をも手にします。しかし、その後は英国外交の表面に出る事はありません。英国の国力が昂まり、英国人が登用される様になつた為です。

以上のように、ホレイショ・パラビチノの動きを通して、当時の英国の政治や経済の実情を解明したいと思います。（本塾大学院文学研究科修士課程在学）

一九一八年のドイツ革命
―社会民主党と労兵協議会との関係をとおして―

渡辺郁美

ドイツでは第一次大戦末期、戦争による疲弊と平和への要求及びロシア革命の影響をうけて革命がおこつた。しかし、この革命は戦争という特殊な事情のもとでおこつたので、それを指導するエリートの形成がおこなわれていなかつた。そのため組織の大きかつた社会民主党が革命をリードしたが、この政党は、大衆を充分コントロールすることが出来なかつた。革命を指導する政党間に於いても又大衆との関係に於いても多くの問題をかかえていた。そこで、この革命を社会民主党と労兵協議会との関係をとお

して見ていく。そのために、社会民主党の性格、（革命前及び革命時に於ける）労兵議協会の内容、そして社会民主党と労兵協議会の関係を調べたい。第一次大戦前ヨーロッパの社会主義政党は修正主義路線をとり、革命政党というよりは、むしろ体制内政党になりかかつていたが、ドイツ社会民主党も例外ではなかつた。この傾向を強めたのは第一次大戦中この政党のとつた態度である。社会民主党はロシアのボルシェヴィキを防ぐためという理由で戦争に賛成したが、それ以来この政党は支配政党と著しく接近した。即ち、体制内政党に変わり、革命政党としての機能を失つた。大衆が平和への要求、皇帝の退位、社会主義革命等色々の要求をもつて立上つた時、その要求にそう処置をとることが出来なかつた。一方、労兵協議会の方であるが、この協議会は社会主義革命という明確なヴィジョンを持つて現われたのではなく、平和への要求、労働者や兵士の権利の獲得、待遇の改善、そしてある場合には、社会主義革命を要求して自然発生的に作られた。革命がすすむに従つて労兵協議会は独自の要求を明確にしはじめた。しかし、社会民主党は労兵協義会を中心とする下からのエネルギーを充分にはコントロール出来ず、この革命は、革命を支配する政党間の対立を包みながら紆余曲折を経た。結局は、多大の犠牲を払つて、議会制民主主義の国家におちついていつた。（本塾大学院文学研究科修士課程在学）

執筆者紹介

米田　治　慶応義塾大学文学部助教授
伊藤清司　同　助教授
小川英雄　同　専任講師
可児弘明　同　助手
坂口昂吉　同　専任講師
会田倉吉　慶応義塾々史資料室主事
慶応義塾大学文学部講師